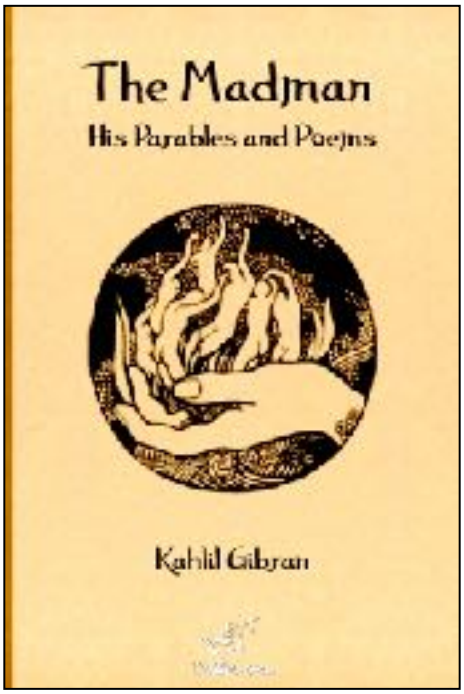
ハリール・ジブラーン

Kahlil Gibran

『狂 人』

その寓話と詩

The Madman



神秘学遊戯団

■ハリール・ジブラーン
　Kahlil Gibran
『狂人（The Madman）』
　――その寓話と詩

ハリール・ジブラーン（Khalil Gibran,1883/1/6– 1931/4/10）は、
レバノン出身のアメリカの詩人・作家・画家・彫刻家。
特に散文詩集『預言者』（The Prophet, 1923年）で知られている。
そのジブラーンの著作の中から、初の英語による
『狂人（The Madman: His Parables and Poems）』（1918）を紹介する。

本書の冒頭にあるように、
語り手は深い眠りから目覚め、
七つの人生で身につけた「仮面」を盗まれていることに気づき、
素顔のまま街を走り、人々に「狂人」と指さされながら、
太陽に素顔を照らされて初めて本当の自由を感じ、
「仮面を盗んだ泥棒たちを祝福する」と叫ぶ。
そして「狂気の中に孤独の自由と、
理解されることから守られる安全を見出した」と語る。

そすでに邦訳はあるようだが（未読）、
どの詩も短くわかりやすいのでとりあげてみることに。

なお、『預言者』の続編にあたる
『預言者の園』（The Garden of the Prophet, 1933）も
未訳らしいので、とりあげてみたいと考えている。

●収録されている詩

〔神（God）〕
〔私の友（My Friend）〕
〔案山子（The Scarecrow）〕
〔夢遊病者たち（The Sleep-Walkers）〕
〔賢い犬（The Wise Dog）〕
〔二人の隠者（The Two Hermits）〕
〔与えることと受け取ることについて（On Giving and Taking）〕
〔七つの自分（The Seven Selves）〕
〔戦争（War）〕
〔狐（The Fox）〕
〔賢い王（The Wise King）〕
〔野心（Ambition）〕
〔新しい快楽（The New Pleasure）〕
〔もう一つの言葉（The Other Language）〕
〔ザクロ（The Pomegranate）〕

〔二つの檻（The Two Cages）〕
〔三匹の蟻（The Three Ants）〕
〔墓掘り人（The Grave-Digger）〕
〔神殿の階段にて（On the Steps of the Temple）〕
〔祝福された都市（The Blessed City）〕
〔善なる神と悪なる神（The Good God and the Evil God）〕
〔敗北（Defeat）〕
〔夜と狂人（Night and the Madman）〕
〔顔（Faces）〕
〔大いなる海（The Greater Sea）〕
〔十字架にかけられて（Crucified）〕
〔天文学者（The Astronomer）〕
〔大いなる渇望（The Great Longing）〕
〔一本の芝生が言った（Said a Blade of Grass）〕
〔目（The Eye）〕
〔二人の学者（The Two Learned Men）〕
〔私の悲しみが生まれたとき（When My Sorrow Was Born）〕
〔そして私の喜びが生まれたとき（And When my Joy was Born）〕
〔完璧な世界（The Perfect World）〕

●本編

あなたがたは、私がどのようにして狂人になったのかと尋ねる。それはこのようにして起こった。

多くの神々が生まれるよりはるか昔のある日、私は深い眠りから覚め、自分の仮面がすべて盗まれていることに気づいた。それは、私が七つの生涯の中で作り上げ、身にまとってきた七つの仮面だった。私は仮面をつけないまま、混雑した通りを「泥棒だ、泥棒だ、呪われた泥棒め」と叫びながら走った。

男も女も私を笑い、ある者は私を恐れて家の中に逃げ込んだ。

そして私が市場にたどり着いたとき、屋根の上に立っていた一人の若者が「あいつは狂人だ！」と叫んだ。私は彼を見上げようと顔を上げた。そのとき、太陽が初めて、私のありのままの裸の顔に口づけをした。

初めて太陽が私の裸の顔に口づけをし、私の魂は太陽への愛で激しく燃え上がった。私はもう、自分の仮面など欲しくなくなった。そして、まるで恍惚の境地にあるかのように、私は叫んだ。「私の仮面を盗んだ泥棒たちに、祝福あれ、祝福あれ！」

こうして、私は狂人になった。

そして私は、この狂気の中に「自由」と「安全」の両方を見出した。すなわち、孤独という名の自由であり、人から理解されないという安全である。なぜなら、私たちを理解する者は、私たちの中にある何かを奴隷にしてしまうからだ。

しかし、自分の安全を誇りすぎてはなるまい。刑務所にいる泥棒でさえ、他の泥棒からは安全なのだから。

ハリール・ジブラーン

〔神（God）〕

遠い古の時代、私の唇に初めて言葉の震えが宿ったとき、私は聖なる山に登り、神に向かってこう言った。「主よ、私はあなたの奴隷です。あなたの隠された御心こそが私の法であり、私は永遠にあなたに従います」しかし神は何も答えず、巨大な嵐のように去っていった。

それから千年の後、私は聖なる山に登り、再び神に向かってこう言った。「創造主よ、私はあなたの創り出したものです。あなたは粘土から私を形作られました。私のすべてはあなたのおかげです」しかし神は何も答えず、千の素早い翼のように去っていった。

それから千年の後、私は聖なる山に登り、再び神に向かってこう言った。「父よ、私はあなたの子です。あなたは憐れみと愛をもって私を産んでくださいました。私は愛と崇拝を通じて、あなたの王国を受け継ぎます」しかし神は何も答えず、遠くの丘を覆う霧のように去っていった。

それから千年の後、私は聖なる山に登り、再び神に向かってこう言った。「私の神よ、私の目的であり、私の成就よ。私はあなたの昨日であり、あなたは私の明日です。私は大地にあるあなたの根であり、あなたは天空にある私の花です。私たちは共に、太陽の顔の前で成長していくのです」

すると神は私の上に身をかがめ、私の耳に甘美な言葉を囁いた。そして、山を下って自分へと流れ込んでくる小川を包み込む海のように、神は私を包み込んでくださった。

そして、私が谷や平野へと下りていったとき、神はそこにもおられた。

〔私の友（My Friend）〕

私の友よ、私はあなたが見ているような人間ではない。見かけなど, 私がまとっている衣服にすぎない。それは、あなたの詮索から私を守り、私の不手際からあなたを守るために、細心の注意を払って織られた衣服なのだ。

私の中にある「私」は、私の友よ、沈黙の家に住んでいる。そして、そこに永遠に留まり続ける。誰にも気づかれず、誰にも近づけない場所として。

私は、自分の言うことをあなたに信じてほしくないし、自分の行うことを信頼してほしくもない。なぜなら、私の言葉は、あなたの思想が音になったものにすぎず、私の行動は、あなたの希望が形になったものにすぎないからだ。

あなたが「東風が吹いている」と言うとき、私は「ああ、東風が吹いているね」と言う。私の心が風にあるのではなく、海にあるということを、あなたに知られたくないからだ。

あなたは私の航海のような思想を理解することはできないし、理解してほしいとも思わない。私は一人で海にいたいのだ。

あなたのいる場所が昼であるとき、私のいる場所は夜だ。それでも私は、丘の上で踊る正午の光や、谷を忍び寄る紫色の影について語る。あなたは私の暗闇の歌を聴くことも、星々に打ち付けられる私の翼を見ることもできないからだ。そして、私はあなたに聴かれたくも、見られたくもないのだ。私は一人で夜と共にいたい。

あなたが自分の天国へと昇るとき、私は自分の地獄へと下る。そんなときでさえ、あなたは橋を架けられない深い淵を越えて「私の仲間よ、私の同志よ」と私を呼び、私は「私の同志よ、私の仲間よ」と呼び返す。私はあなたに自分の地獄を見せたくないからだ。その炎はあなたの視力を焼き、その煙はあなたの鼻を塞いでしまうだろう。そして、私は自分の地獄をあまりにも愛しているがゆえに、あなたにそこを訪れてほしくないのだ。私は一人で地獄にいたい。

あなたは真実と美と正義を愛する。私はあなたのために、それらのものを愛することは素晴らしく、ふさわしいことだと言う。しかし、私の心の中では、あなたのその愛を笑っているのだ。

それでも、私はあなたにその嘲笑を見せたくはない。私は一人で笑いたいのだ。

私の友よ、あなたは善良で、慎重で、賢い。いや、あなたは完璧だ。だから私もまた、あなたに対して賢く、慎重に話す。それなのに、私は狂っているのだ。しかし、私は自分の狂気を仮面で隠している。私は一人で狂っていたいのだ。

私の友よ、あなたは私の友ではない。だが、どうすればあなたに理解させられるだろうか。私の道はあなたの道ではない。それなのに、私たちは手を取り合って、共に歩んでいるのだ。

〔案山子（The Scarecrow）〕

あるとき、私は案山子に向かってこう言った。「この寂しい畑にずっと立ち続けているなんて、きっと疲れるだろうね」

すると案山子は言った。「誰かを怖がらせる喜びというのは、深くて、ずっと続くものさ。だから決して飽きることなんてないよ」

私は一分ほど考えてから言った。「確かにその通りだ。なぜなら、私もその喜びを知っているからね」すると彼は言った。「その喜びがわかるのは、体に藁が詰まっている者だけさ」

私はそこを立ち去ったが、彼が私を褒めたのか、それとも見下したのかは分からなかった。

一年が過ぎ、その間に案山子は哲学者になっていた。再び彼の前を通りかかったとき、私は二羽のカラスが彼の帽子の下で巣を作っているのを目にした。

〔夢遊病者たち（The Sleep-Walkers）〕

私の生まれた町に、ある母親と娘が暮らしていた。二人はどちらも夢遊病の癖があった。

ある夜、世界が静寂に包まれていたとき、母親と娘は眠ったまま歩き回り、霧に覆われた自分たちの庭でばったりと出会った。

すると、母親が口を開いてこう言った。
「ついに、ついに会ったわね、私の敵（かたき）！ 私の若さを台無しにし、私の人生の廃墟の上に自分の人生を築き上げたお前！ お前を殺してしまえたらいいのに！」

続いて、娘も口を開いてこう言った。「ああ、憎たらしい女、我がままで老いぼれた女！ 自由でありたい私と、本当の私の間に立ちはだかる壁！ 自分の色あせた人生の残響（エコー）を、私に生きさせようとする女！ あんたが死んでくれたらいいのに！」

その瞬間、雄鶏が鳴き、二人の女性は目を覚ました。

母親は優しく言った。
「そこにいるのはお前かい、我が子よ？」
すると娘も優しく答えた。
「ええ、お母さん」

〔賢い犬（The Wise Dog）〕

ある日のこと、一匹の賢い犬が、集まっている猫たちの群れのそばを通りかかった。

犬が近づいて見ると、猫たちは何かにひどく夢中になっており、自分のことなどまったく気にも留めていない様子だったので、犬は足を止めて様子を見ることにした。

すると、猫の群れの真ん中から、大きくて厳かな¥一匹の猫が立ち上がり、みんなを見回してこう言った。
「兄弟たちよ、祈りなさい。そして、少しの疑いも抱かずに、何度も何度も祈りを捧げるのです。そうすれば、間違いなく、天からネズミの雨が降ってくることでしょう」

これを聞いた犬は、心の中でせせら笑い、猫たちから背を向けてこう言いながら去っていった。
「おお、盲目で愚かな猫たちよ。祈りや信仰、そして懇願によって天から降ってくるのは、ネズミではなく『骨』であると、聖書にも書かれているし、私も、私の前の先祖たちもずっと知っているというのに」

〔二人の隠者（The Two Hermits）〕

ある寂しい山の上に、神を崇拝し、お互いを愛し合って暮らす二人の隠者がいた。

この二人の隠者は、一個のお椀を持っており、それが彼らの唯一の財産だった。

ある日、年上の隠者の心に悪霊が入り込んだ。彼は年下の隠者のところへ行き、こう言った。
「私たちが共に暮らしてからも、ずいぶん長くなった。そろそろ別れる時が来たようだ。私たちの財産を分け合おうではないか」

それを聞いた年下の隠者は悲しみ、こう言った。

「お兄さ、あなたが私を置いて去ってしまうなんて、とても悲しいです。ですが、どうしても行かなければならないと言うのなら、そうしましょう」
そして彼はお椀を持ってきて、年上の隠者に差し出しながら言った。
「これは二つに分けることができません。お兄さん、これをあなたのものにしてください」

すると年上の隠者は言った。
「施しなど受けるつもりはない。私は自分のもの以外は何も受け取らないぞ。これは分割されねばならない」

年下の隠者は言った。
「もしこのお椀を割ってしまったら、あなたにとっても私にとっても、何の役にも立たなくなってしまいます。もしよろしければ、くじ引きで決めませんか？」

しかし、年上の隠者は再び言った。
「私は正義と、自分の取り分だけが欲しいのだ。正義と自分の取り分を、そんなくじ引きのような、不確かな偶然に委ねるわけにはいかない。お椀は絶対に分けるのだ」

年下の隠者は、これ以上話しても無駄だと悟り、こう言った。
「もしそれが本当にあなたの望みであり、どうしてもそうしたいとおっしゃるのなら、さあ、今ここでお椀を割りましょう」

すると、年上の隠者の顔は恐ろしく暗くなり、こう叫んだ。
「この呪われた意気地なしめ！ お前は争う気すらないのか！」

〔与えることと受け取ることについて（On Giving and Taking）〕

あるところに、谷が一杯になるほどの、大量の針を持っている男がいた。

ある日のこと、イエスの母（聖母マリア）が彼のところにやってきて、こう言った。
「友よ、息子の衣服が破れてしまいました。彼が神殿に行く前に繕わなければなりません。どうか、針を一本分けていただけないでしょうか？」

しかし男は、彼女に針を一本も与えなかった。その代わりに、彼は「与えることと受け取ることについて」の学術的な説教を彼女に授け、息子が神殿に行く前にそれを伝えるようにと言い放った。

〔七つの自分（The Seven Selves）〕

夜の最も静かな時刻、私が半ば眠りについたまま横たわっていると、私の中にある「七つの自分」が共に座り、このように囁き合っていた。

第一の自分：
「おい、俺はこの何年もの間、この狂人の中に住み着いてきた。だが、昼には彼の痛みを新しくし、夜には彼の悲しみを再び作り出すこと以外、何もすることがない。もう自分の運命には耐えられない、私は反逆するぞ」

第二の自分：
「兄弟よ、お前の運命は俺の運命よりまだマシさ。なぜなら、俺はこの狂人の『喜びの自分』になることを与えられているのだから。俺は彼の笑い声を笑い、彼の幸せな時間を歌い、三重の翼を持った足で彼の輝かしい思想を踊らせる。この退屈な存在に対して反逆したいのは、俺のほうだ」

第三の自分：
「では、この私はどうなるのだ？ 愛に翻弄される自分、激しい情熱と奇妙な欲望の燃え盛る松明である私は？ この狂人に反逆したいのは、恋に病んだこの私のほうだ」

第四の自分：
「お前たち全員の中で、最も惨めなのはこの私だ。なぜなら、私には忌まわしい憎しみと、破壊的な嫌悪しか与えられなかったのだから。地獄の黒い洞窟で生まれた、嵐のようなこの私こそが、この狂人に仕えることに抗議したいのだ」

第五の自分：
「いや、私こそが反逆したい。思考する自分、空想する自分、飢えと渇きの自分。未知のものや、まだ創られていないものを求めて、休息することなく彷徨う運命にあるこの私こそが、お前たちではなく、反逆すべきなのだ」

第六の自分：
「そして私は、働く自分、哀れな労働者だ。忍耐強い手と、憧れに満ちた瞳で、日々を様々なイメージへと形作り、形のない要素に新しく永遠の形を与える。この孤独な私こそが、この落ち着きのない狂人に反逆したいのだ」

第七の自分：
「お前たちが皆、この男に反逆したいなんて、なんて奇妙なことだろう。なぜなら、お前たちは一人残らず、果たすべきあらかじめ定められた運命を持っているのだから。ああ！ 私もお前たちのうちの一人のように、決まった運命を持つ自分であれたなら！ だが、私には何もない。
私は『何もしない自分』だ。お前たちが忙しく生命を再創造している間、言葉を失った、空っぽの、どこでもなく、いつでもない場所にただ座っているだけの自分だ。近隣の仲間たちよ、本当に反逆すべきなのは、お前たちなのか、それとも私なのか？」

第七の自分がこのように語ると、他の六つの自分たちは彼を憐れみの目で見つめたが、それ以上は何も言わなかった。そして夜が更けるにつれ、一つ、また一つと、彼らは新しく幸福な服従に包まれながら眠りについた。

しかし、第七の自分だけは目覚めたまま、すべてのものの背後にある「虚無」をじっと見つめ続けていた。

〔戦争（War）〕

ある夜、宮殿で宴が開かれていたとき、一人の男がやってきて王子の前にひれ伏した。宴に集まった人々が皆その男に目をやると、彼の片方の目はえぐれており、空っぽになった眼窩から血が流れていた。

王子が「お前に何があったのだ？」と尋ねると、男はこう答えた。「王子よ、私の職業は泥棒です。今夜は月が出ていなかったため、両替商の店に盗みに入ろうといたしました。ところが、窓から這い入る際に場所を間違えて、織物職人の店に入ってしまったのです。暗闇の中で私は織機にぶつかってしまい、目を突き抜かれてしまいました。王子よ、どうかあの織物職人に正義の裁きを下してください」

そこで王子は織物職人を呼び出させ、彼は宮殿にやってきた。そして、職人の片方の目をえぐり出すべし、という判決が下された。

すると織物職人は言った。
「王子よ、その判決は公正です。私の片目が奪われるのは当然のことでございます。しかしながら、ああ、悲しいかな！ 私は自分が織る布の両面を確認するために、どうしても両目が必要なのです。ですが、私の隣人に靴職人がおります。彼も両目を持っていますが、彼の仕事においては、両目は必要ありません」

そこで王子は靴職人を呼び出させた。靴職人がやってくると、人々は彼の二つの目のうち、片方をえぐり出した。

こうして、正義は満たされた。

〔狐（The Fox）〕

一匹の狐が、日の出のときに自分の影を見つめてこう言った。
「よし、今日の昼食にはラクダをまるごと一頭いただくとするか」

そして彼は、ラクダを探し求めて朝の間ずっと歩き回った。

しかし正午になり、彼は再び自分の影を目にした。――すると彼はこう言った。
「ネズミ一匹で十分だな」

〔賢い王（The Wise King）〕

かつて、はるか遠くにあるウィラニという都市に、強大でありながらも賢い一人の王が君臨していた。彼はその強さゆえに恐れられ、その知恵ゆえに愛されていた。

その都市の中心には、冷たくて水晶のように澄んだ水が湧き出る一つの井戸があった。都市の住民はみな、この井戸から水を飲んでいた。王や宮廷の家臣たちも例外ではなかった。なぜなら、街には他に井戸がなかったからだ。

ある夜、誰もが眠りについているとき、一人の魔女が都市に忍び込んだ。彼女は不思議な液体を七滴、その井戸の中に垂らし、こう唱えた。「これよりのち、この水を飲む者はみな狂人となるであろう」

翌朝、王と侍従長を除くすべての住民が井戸の水を飲み、魔女の予言通りにみな狂ってしまった。

その日一日、狭い通りや市場に集まった人々は、お互いにこう囁き合うことしかしなかった。

「王様が狂ってしまわれた。私たちの王と侍従長は理性を失ってしまった。狂った王に統治されるわけにはいかない。王座から引きずり下ろさなければ」

その日の夕方、王は金色の杯にあの井戸の水を満たすよう命じた。そして水が運ばれてくると、王はそれを深く飲み干し、侍従長にも飲むようにと手渡した。

すると、そのはるか遠きウィラニの都市は、大きな喜びに包まれた。なぜなら、彼らの王と侍従長が、ついに「理性を取り戻した」からである。

〔野心（Ambition）〕

三人の男が居酒屋のテーブルで顔を合わせた。一人は織物職人、もう一人は大工、そして三人目は農夫（地を耕す者）だった。

織物職人が言った。
「今日、上質なリネンの経帷子（死装束）が金貨二枚で売れたんだ。飲みたいだけワインを注文しようじゃないか」

「俺もさ」と大工が言った。
「最高のできの棺桶が売れてね。ワインと一緒に立派なロースト肉も頼もう」

「俺は墓を一つ掘っただけさ」と農夫が言った。
「だが、雇い主が倍の報酬を払ってくれてね。ハチミツのケーキも付けようじゃないか」

その晩、居酒屋は一晩中大忙しだった。彼らが何度もワインやお肉、ケーキを注文したからだ。彼らは大いに楽しんでいた。

居酒屋の主人は両手をこすり合わせ、妻に向かって微笑んだ。客たちが惜しみなくお金を使ってくれていたからだ。

彼らが店を出る頃には月が高く昇っており、男たちは一緒に歌い、叫びながら道を歩いていった。

主人と妻は居酒屋の戸口に立ち、彼らの後ろ姿を見送った。

「ああ！」と妻は言った。
「なんて素敵な旦那方がお見えになったのかしら！ とても気前が良くて、あんなに楽しそう！ 毎日こんな幸運を私たちに運んできてくれたらいいのに！ そうすれば、私たちの息子も居酒屋の主人になってこんなに苦労して働く必要はなくなるわ。息子にきちんとした教育を受けさせて、聖職者にすることだってできるのに」

〔新しい快楽（The New Pleasure）〕

昨夜、私は新しい快楽を思いついた。そして、試しにそれを初めて味わってみようとしたその時、一人の天使と一人の悪魔が、私の家に向かって猛烈な勢いで駆け込んできた。

二人は私の家のドアの前で鉢合わせになり、私が新しく創り出した快楽をめぐって、お互いに激しい掴み合いの喧嘩を始めた。

一方は「これは罪だ！」と叫び、もう一方は「これは美徳だ！」と叫びながら。

〔もう一つの言葉（The Other Language）〕

私が生まれて三日目のこと、シルクの揺りかごに横たわりながら、自分の周りにある新しい世界を驚きと狼狽の目で見つめていたとき、母が乳母に向かってこう言った。
「この子はどうですか？」

すると乳母はこう答えた。
「とても元気ですよ、奥様。もう三回もミルクをあげました。これほど幼いのに、こんなに嬉しそうにしている赤ちゃんは見たことがありません」

私は憤慨し、思わず叫んだ。
「お母さん、そんなの嘘だよ！ 僕のベッドは硬いし、僕が吸ったミルクは苦い。それに、胸の匂いは不快だし、僕はものすごく惨めなんだ！」
しかし、母も乳母も理解してはくれなかった。なぜなら、私が話していたのは、私がやってくる前にいた「あの世」の言葉だったからだ。

生まれて二十一日目、私が洗礼を受けていたとき、司祭が母に向かってこう言った。
「奥様、息子さんがキリスト教徒としてお生まれになったことを、本当に幸せに思わなければなりませんよ」

私は驚いて、司祭にこう言った。
「それなら、天国にいるあなたの神様は不幸せに違いないね。だって、あなたはキリスト教徒として生まれてこなかったのだから」
しかし、司祭もまた私の言葉を理解しなかった。

それから七つの月が過ぎたある日、占い師が私を見て、母にこう言った。
「息子さんは将来、政治家になり、人々を率いる偉大なリーダーになるでしょう」

だが私は叫んだ。
「それは偽りの預言者だ！ 僕は音楽家になるんだ。音楽家以外の何者にもなりはしない！」
しかし、その年齢になっても私の言葉は誰にも理解されず、私は大いに驚きあきれた。

それから三十三年が経ち、その間に母も、乳母も、司祭もみんな亡くなってしまった（神の影が彼らの魂の上にありますように）。しかし、あの占い師だけはまだ生きていた。

昨日、私は神殿の門の近くで彼に会った。私たちが言葉を交わしていると、彼はこう言った。
「あなたが偉大な音楽家になることは、最初からずっと分かっていましたよ。あなたの赤ん坊の頃に、私はあなたの未来をしっかりと予言していたのですから」

そして、私は彼の言葉を信じた。――なぜなら、今や私自身もまた、あの「もう一つの世界の言葉」をすっかり忘れてしまっていたからだ。

〔ザクロ（The Pomegranate）〕

かつて、私がザクロの心（実の中）に住んでいたとき、一粒の種がこう言うのが聞こえた。
「いつか私は一本の木になるんだ。私の枝では風が歌い、私の葉の上では太陽が踊るだろう。そして、どんな季節を通しても、私は強く美しくあり続けるんだ」

すると、別の種が口を開いてこう言った。
「私があなたくらい若かった頃は、私もそんな風に考えていたものさ。だけど、物事を量ったり測ったり（現実的に考えたり）できるようになった今では、自分の希望がいかに虚しいものだったかが分かるよ」

さらに三人目の種が言った。
「私たちの中に、それほど偉大な未来を約束してくれるものなんて、何一つ見当たらないよ」

すると四人目が言った。
「だけど、もっと大いなる未来が訪れないのだとしたら、私たちの人生なんて、ただのお笑い草になってしまうじゃないか！」

五人目が言った。
「自分たちが何者であるかさえ分かっていないのに、将来どうなるかなんて、どうして議論し合う必要があるんだい？」

しかし六人目が答えた。
「私たちが何者であれ、私たちはこれからもそのままであり続けるのさ」

そして七人目が言った。
「すべてがどうなるか、私にはとてもはっきりとした考えがある。だけど、それを言葉に表すことができないんだ」

それから八人目が話し、九人目が話し、十人目が話し――そして、さらに多くの種たちが一斉に話し始めたため、たくさんの声が混ざり合って、私にはもう何も聞き分けることができなくなってしまった。

だから私は、まさにその日のうちに、種が少なくてほとんど沈黙している「マルメロ」の実の心の中へと引っ越した。

〔二つの檻（The Two Cages）〕

私の父の庭には、二つの檻がある。

一方の檻には、父の奴隷たちがニネヴェの砂漠から連れてきた一頭のライオンが捕らえられている。そしてもう一方の檻には、歌を忘れた一羽の雀がいる。

毎朝、夜明けになると、雀はライオンに向かってこう呼びかける。

「おはよう、囚われの兄弟よ」

〔三匹の蟻（The Three Ants）〕

太陽の下で眠っている男の鼻の上で、三匹の蟻が出会った。彼らはそれぞれの部族の習慣に従ってお互いに挨拶を交わしたあと、そこに立ち話にとどまった。

第一の蟻が言った。
「この丘や平原は、私がこれまで知る中で最も荒れ果てた土地だ。何か一粒の穀物でもないかと一日中探しまわったが、どこにも見当たらないよ」

第二の蟻が言った。
「私もあらゆる隅々や開けた場所を訪ねてみたけれど、やはり何も見つからなかった。これこそ、私の部族の人々が『何ひとつ育たない、柔らかく動く土地』と呼んでいる場所に違いないね」

すると第三の蟻が頭を上げてこう言った。
「友よ、私たちは今、すべての蟻の頂点に立つ『至高の蟻』の鼻の上に立っているのだ。その力強く無限なる蟻の身体はあまりにも巨大で、私たちには見ることができない。その影はあまりにも広大で、私たちには追うことができない。その声はあまりにも大きく、私たちには聴くことができない。そして、そのお方はあらゆる場所に同時に偏在していらっしゃるのだ」

第三の蟻がこのように語ると、他の蟻たちはお互いを見合わせて笑い転げた。

まさにその瞬間、男が寝返りを打ち、眠ったまま手を上げて自分の鼻をポリポリと掻いた。――そして、三匹の蟻はみな押しつぶされてしまった。

〔墓掘り人（The Grave-Digger）〕

あるとき、私が自分の「死んだ自分」の一つを地面に埋めていると、墓掘り人が通りかかって私にこう言った。
「ここに誰かを埋めに来るすべての人々の中で、私はあんただけが気に入っているよ」

私は言った。
「そう言ってもらえるのは非常に嬉しいが、一体なぜ私を気に入ってくれたのかね？」

すると彼はこう答えた。
「なぜって、他のみんなは泣きながらやってきて、泣きながら去っていく。――だが、あんただけは笑いながらやってきて、笑いながら去っていくからさ」

〔神殿の階段にて（On the Steps of the Temple）〕

昨日の夕方、神殿の大理石の階段で、私は二人の男の間に座っている一人の女性を見かけた。

彼女の顔の片側は青ざめており、もう片側は赤らんでいた。

〔祝福された都市（The Blessed City）〕

私が若かった頃、ある都市では誰もが「聖書」の教えに完全に従って暮らしているという話を耳にした。

私は言った。「私はその都市を訪ね、そこにある祝福を授かろう」

その都市ははるか遠くにあった。私は旅のために大量の旅支度を用意した。四十日間の旅を経て私はその都市を目にし、四十一日目にそこへと足を踏み入れた。

すると、なんということだろう。そこに暮らす住民は誰も彼も、片方の目しかなく、片方の手しか持っていなかったのだ。私はたいそう驚き、心の中でこう呟いた。「これほど神聖な都市の 人々が、片目と片手しか持っていないということがあろうか？」

やがて、住民たちのほうも驚いていることに私は気づいた。なぜなら彼らは、私の二つの手と二つの目をひどく不思議そうに見つめていたからだ。彼らが互いにひそひそと話し合っているとき、私は彼らにこう尋ねた。「ここは本当に、誰もが聖書の教えに従って暮らしているという『祝福された都市』なのですか？」

彼らは答えた。「そうだ、ここがその都市だ」

「では」と私は言った。「あなたがたに一体何があったのですか？ あなたがたの右目と右手はどこへ行ってしまったのですか？」

すると、人々はみな心を揺さぶられた様子で、こう言った。「ついてきて、自分の目で確かめるがいい」

彼らは、都市の中心にある神殿へと私を連れて行った。その神殿の中で、私は手と目の山を見た。——それらはすべて、干からびていた。

私は言った。「ああ、悲しいかな！ 一体どんな侵略者が、あなたがたにこのような残酷な仕打ちをしたのですか？」

人々の間にざわめきが広がった。そして、彼らのうちの一人の長老が前に進み出て、こう言った。「これは私たちが自分自身で行ったことだ。神は、私たちの中にある悪に対して、私たちを勝利者としてくださったのだ」

長老は私を高い祭壇へと案内し、人々もみな後ろに従った。彼は祭壇の上に刻まれた碑文を私に示し、私はそこにある言葉を読んだ。

『もし、あなたの右の目があなたをつまずかせるなら、それをえぐり出して捨てなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に投げ込まれないほうが、あなたにとって有益だからである。また、もしあなたの右の手があなたをつまずかせるなら、それを切り取って捨てなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に落ちないほうが、あなたにとって有益だからである。』

そのとき、私はすべてを理解した。私はすべての人々のほうを振り返り、こう叫んだ。「あなたがたの中に、二つの目や二つの手を持っている男や女は一人もいないのですか？」

すると彼らは私にこう答えた。「ああ、一人もいない。まだ聖書を読んでその戒めを理解することができない、幼すぎる子供たちのほかには、五体満足な者は誰もいないのだ」

私たちが神殿を出ると、私はすぐさまその「祝福された都市」を立ち去った。なぜなら、私はもう幼くはなかったし、聖書を読むことができたからだ。

〔善なる神と悪なる神（The Good God and the Evil God）〕

善なる神と悪なる神が、山の頂上で出会った。

善なる神が言った。
「やあ、こんにちは、兄弟」

悪なる神は何も答えなかった。

そこで善なる神は言った。
「今日はご機嫌が斜めのようだね」

「その通りさ」と悪なる神は言った。
「というのも、最近よくお前と間違えられてな。お前の名前で呼ばれたり、まるでお前であるかのように扱われたりする。それがひどく不愉快なのだ」

すると善なる神は言った。
「いや、実は私も、お前と間違えられてお前の名前で呼ばれることがよくあるのだよ」

悪なる神は、人間の愚かさを呪いながら、足早に去っていった。

〔敗北（Defeat）〕

敗北よ、私の敗北よ、私の孤独であり、私の気高さよ。
お前は私にとって、千の勝利よりも愛おしく、
この世のあらゆる栄光よりも、私の心に甘美に響く。

敗北よ、私の敗北よ、私の自己知であり、私の抵抗よ。
お前を通して、私は自分がまだ若く、足が速いことを知る。
色あせてゆく月桂冠に、罠に嵌められることもないと知る。
そしてお前の中に、私は「一人であること」を見出した。
人から避けられ、蔑まれることの喜びを。

敗北よ、私の敗北よ、私の輝く剣であり、盾よ。

お前の瞳の中に、私は読み取ったのだ。
――王座に就くということは、奴隷になるということ。
――人に理解されるということは、平凡に引き下げられるということ。
――すべてを把握されるということは、ただ成熟の極みに達し、
熟した果実のように、落ちて貪り食われるだけのことなのだと。

敗北よ、私の敗北よ、私の大胆な相棒よ。
お前は私の歌を、私の叫びを、そして私の沈黙を聴くが良い。
お前以外の誰も、私に語ることはできない。
翼の羽ばたきについて、
海を突き動かす衝動について、
そして、夜に燃え盛る山々について。
お前だけが、私の険しく岩だらけの魂を登りつめるのだ。

敗北よ、私の敗北よ、私の不滅の勇気よ。
お前と私は、嵐と共に笑い合う。
そして私たちは共に、自分の中で死にゆくすべてのもののために墓を掘る。
私たちは強い意志を持って太陽の下に立ち、
そして私たちは、危険な存在となるのだ。

〔夜と狂人（Night and the Madman）〕

「私はお前と同じだ、おお、夜よ。暗く、そして裸だ。私は己の白昼夢の上にある、燃え盛る道を歩む。私の足が大地に触れるたび、そこから巨大な樫の木が湧き起こるのだ」

「いや、お前は私には似ていない、おお、狂人よ。なぜならお前は、自分が砂の上にどれほど大きな足跡を残したかを見ようと、未だに後ろを振り返っているではないか」

「私はお前と同じだ、おお、夜よ。静かで、そして深い。私の孤独の真ん中には、出産の間に横たわる女神が眠っている。そして、そこから生まれようとしている者の中で、天国と地獄が触れ合っているのだ」

「いや、お前は私には似ていない、おお、狂人よ。なぜならお前は、未だに痛みの前でおののき、深淵の歌声に怯えているではないか」

「私はお前と同じだ、おお、夜よ。激しく、そして恐ろしい。私の耳には、征服された国々の叫びや、忘れ去られた大地へのため息がひしめき合っているのだ」

「いや、お前は私には似ていない、おお、狂人よ。なぜならお前は、いまだに己の『小さな自分』を相棒として連れ歩き、自分の中にある『怪物の自分』と友人になれずにいるではないか」

「私はお前と同じだ、おお、夜よ。残酷で、そして凄まじい。私の胸は海で燃え盛る船の光に照らされ、私の唇は討たれた戦士たちの血で濡れているのだ」

「いや、お前は私には似ていない、おお、狂人よ。なぜならお前には、未だに魂の片割れを求める欲望が残っており、自分自身に対して本当の孤独になりきれていないではないか」

「私はお前と同じだ、おお、夜よ。喜びに満ち、そして朗らかだ。私の影に住まう者は今や、処女のワインに酔いしれ、私の後ろに従う女は、愉快そうに罪を犯しているのだ」

「いや、お前は私には似ていない、おお、狂人よ。なぜならお前の魂は七重のベールに包まれており、お前は自分の心をその手にさらけ出してはいないではないか」

「私はお前と同じだ、おお、夜よ。忍耐強く、そして情熱的だ。私の胸の中には、色あせた口づけの経帷子に包まれた、千人の死んだ恋人たちが埋められているのだ」

「ほう、狂人よ、本当にお前は私に似ているというのか？ 私に似ているというのか？ ならばお前は、嵐を馬のように乗りこなし、稲妻を剣のように掴むことができるのか？」

「お前と同じだ、おお、夜よ。お前と同じように力強く、そして高い。私の王座は、打ち倒された神々の山の頂に築かれている。私の前を、日々が通り過ぎては私の衣服の裾に口づけをしていく。だが、彼らが私の顔をじっと見つめることは決してないのだ」

「本当にお前は私に似ているのか、私の最も暗い心の申し子よ？ お前は私の野生の思想を考え、私の広大な言葉を話すというのか？」

「そうだ、私たちは双子の兄弟なのだ、おお、夜よ。なぜなら、お前は果てしない宇宙を明らかにし、私は己の魂を明らかにするのだから」

〔顔（Faces）〕

私は、千もの表情を持つ顔を見たことがある。その一方で、まるで型にはめられたかのように、ただ一つの表情しか持たない顔も見たことがある。

私は、その輝きを透かして、その下に潜む醜さが見えてしまう顔を見たことがある。その一方で、どれほど美しいかを確かめるために、その輝きをそっと持ち上げなければならない顔も見たことがある。

私は、中身が空っぽなのに多くのシワが刻まれた老いた顔を見たことがある。その一方で、すべての事柄が深く刻み込まれている、なめらかな顔を見たことがある。

私は顔というものを知っている。なぜなら、私は自分自身の目が織りなす織物を透かして、その下にある真実の姿を見つめているからだ。

〔大いなる海（The Greater Sea）〕

私の魂と私は、身を清めるために大きな海へと出かけた。そして海岸に着くと、私たちは誰の目にも触れない、ひっそりとした寂しい場所を探して歩き回った。

しかし歩いていくうちに、灰色の岩の上に腰掛け、袋から塩をひとつまみずつ取り出しては海へと投げ入れている一人の男が目に入った。

「あれは『悲観主義者』ね」と私の魂は言った。
「ここを離れましょう。ここでは泳げないわ」

私たちはさらに歩き、小さな入り江にたどり着いた。そこでは、白い岩の上に立った男が、宝石を散りばめた箱から砂糖を取り出しては海へと投げ入れていた。
「そして、あれは『楽観主義者』よ」と私の魂は言った。
「あの人にも、私たちの裸の体を見られてはならないわ」

私たちはさらに先へと歩いた。ある浜辺で、死んだ魚を拾い上げては、優しく水の中へと戻している男を見かけた。
「あの人の前でも泳ぐわけにはいかないわ」と私の魂は言った。
「彼は『人道主義的な慈善家』よ」私たちは通り過ぎた。

それから私たちがやってきた場所では、一人の男が砂の上に自分の影をなぞり描いていた。
大きな波がやってきてはそれを消し去ったが、彼は何度も何度も、懲りずに自分の影をなぞり続けていた。
「彼は『神秘主義者』よ」と私の魂は言った。
「彼のところからも離れましょう」

私たちはさらに歩き続け、静かな波間の隠れ家のような場所で、海の泡をすくい上げては、それを雪花石膏の鉢に入れている男を見かけた。
「彼は『理想主義者』よ」と私の魂は言った。
「絶対に、彼に私たちの裸（の真実）を見せてはならないわ」

私たちは先へ先へと歩いた。突然、「これぞ海だ！ これぞ深い海だ！ これぞ広大で力強い海だ！」と叫ぶ声が聞こえてきた。その声の主のところへ行ってみると、その男は海に完全に背を向け、耳に貝殻を当てて、そのかすかな囁きに耳を澄ませていた。
「通り過ぎましょう」と私の魂は言った。
「彼は『現実主義者』よ。自分が把握しきれない全体のすべてには背を向けて、切り取られたほんの一部だけに夢中になっているのよ」

そこで私たちは通り過ぎた。岩の間の藻が茂った場所に、頭を砂の中にすっぽりと埋めている男がいた。私は魂に向かって言った。
「ここなら泳げるよ。彼には私たちが見えないからね」
「いいえ」と私の魂は言った。
「なぜなら、彼こそがあらゆる者の中で最も厄介で致命的な存在だからよ。彼は『清教徒』だわ」

そのとき、私の魂の顔に、そしてその声の中に、大きな悲しみが押し寄せてきた。
「ここから立ち去りましょう」と彼女は言った。
「私たちが泳げるような、誰もいない、隠された場所なんてどこにもないわ。私は、この風に自分の金髪をなびかせたくないし、この空気の中に白い胸をさらしたくもない。この光に、私の神聖な裸の姿を暴かれたくはないのよ」

こうして私たちは、さらに「大いなる海」を追い求めて、その海をあとにした。

〔十字架にかけられて（Crucified）〕

私は人々に向かってこう叫んだ。「私は十字架にかけられたいのだ！」

すると人々は言った。「なぜお前の血の責任を、私たちが負わねばならないのだ？」

私は答えた。「狂人たちを十字架にかけることなしに、どうしてあなたがたの心が高められるというのだ？」

人々は私の言葉に耳を傾け、私は十字架にかけられた。そして、その磔刑は私を深く満足させた。

私が大地と天の間に吊るされたとき、人々は私を見ようと頭を高く上げた。彼らの心は引き上げられた。なぜなら、彼らはそれまで一度も、自らの頭を高く上げたことなどなかったからだ。

しかし、人々がそこに立ち、私を見上げていると、一人がこう叫んだ。
「お前は一体、何の罪を償おうとしているのだ？」

また別の者が叫んだ。
「どんな大義のために、お前は自分を犠牲にしているのだ？」

三人目が言った。
「そんな代償を払って、この世の栄光を買うつもりか？」
すると四人目が言った。
「見ろ、あいつは微笑んでいるぞ！ これほどの苦痛が、許されるというのか？」

私は彼ら全員に、こう答えた。

「私が微笑んでいたこと、それだけを覚えておくがいい。私は何も償ってはいない――犠牲になってもいない――栄光を望んでもいない。そして、私が許すべきものなど何一つない。私はただ渇いていたのだ。だから、自分の血を飲ませてくれと、あなたがたに懇願したのだ。狂人の渇きを癒やすことができるものが、自分自身の血のほかに何があるというのだ？

私は言葉を失っていた――だから、言葉を語る『口』の代わりに、あなたがたに『傷口』を求めたのだ。私はあなたがたの昼と夜という狭い世界に囚われていた――だから、もっと大いなる昼と夜へとつながる『扉』を追い求めたのだ。

そして今、私は去っていく。――すでに十字架にかけられて去っていった、かつての先人たちと同じように。私たちが十字架にかけられることに疲れ果てているなどと、決して思ってはならない。なぜなら、私たちは、もっと大いなる大地の狭間で、もっと大いなる天の狭間で、より大いなる、さらに大いなる人間たちによって、何度も十字架にかけられ続けねばならないのだから」

〔天文学者（The Astronomer）〕

神殿の影で、私の友人と私は、一人で座っている一人の盲目の男を見かけた。友人は言った。
「見なよ、あの人こそ私たちの国で最も賢い人だ」

そこで私は友人と別れ、その盲目の男に近づいて挨拶をした。そして、私たちは言葉を交わした。

しばらくして、私はこう尋ねた。
「不躾な質問をお許しください。ですが、あなたはいつから目が見えないのですか？」

「生まれたときからさ」と彼は答えた。

私は言った。
「それでは、あなたはどのような知恵の道を歩んでおられるのですか？」
すると彼は言った。
「私は天文学者なのだよ」

それから、彼は自分の胸の上に手を当てて、こう言った。
「私は、これらすべての太陽や月、そして星々を観察しているのだ」

〔大いなる渇望（The Great Longing）〕

私はここに、私の兄弟である山と、私の姉妹である海の間に座っている。

私たち三人は、孤独（において一つであり、私たちを固く結びつけている愛は深く、強く、そして奇妙なものだ。いや、それは私の姉妹の深さよりも深く、私の兄弟の強さよりも強く、そして私の狂気が持つ奇妙さよりも、さらに奇妙なものなのだ。

最初の灰色の夜明けが、私たちの姿をお互いの目に映し出して以来、幾千幾万もの永劫の時間が通り過ぎていった。私たちは多くの世界が生まれ、成熟し、そして死んでゆくのを目にしてきたが、今なお熱望に満ち、若々しいままだ。

私たちは若く、熱望に満ちているが、それなのに未だ伴侶はなく、訪れる者もいない。私たちは途切れることのない抱擁を半分交わしたまま横たわっているが、決して慰められることはない。抑え込まれた欲望や、使われることのない情熱に、一体どんな慰めがあるというのだ？ 私の姉妹（海）のベッドを温める、燃え盛る炎の神はどこからやってくるのだろうか？ そして、私の兄弟（山）の炎を消し去ってくれる、どのような雌の激流（川）が訪れるのだろうか？ そして、この私の心を支配する女性とは、一体誰なのだろうか？

夜の静寂の中で、私の姉妹は眠りながら、炎の神のまだ見ぬ名前をひそひそと呟いている。そして私の兄弟は、はるか遠くの冷たくて距離のある女神に向かって声を限りに呼びかけている。しかし、この私が眠りの中で一体誰を呼び求めているのか、私には分からない。

私はここに、私の兄弟である山と、私の姉妹である海の間に座っている。私たち三人は、孤独において一つであり、私たちを固く結びつけている愛は深く、強く、そして奇妙なものなのだ。

〔一本の芝生が言った（Said a Blade of Grass）〕

あるとき、一本の芝生の葉が、落ちてくる秋の落ち葉に向かってこう言った。

「あなたときたら、なんて大きな音を立てて落ちてくるのかしら！ 私の冬の夢がすっかり台無しになってしまうわ」

落ち葉は憤慨してこう言い返した。
「育ちが悪く、地面の底にへばりついている分際で！ 歌うこともできず、不機嫌でちっぽけな奴め！ お前は高い空の上の世界に住んだことがないから、歌の響きというものが分からないのだ」

やがて、その秋の落ち葉は地面の上に横たわり、眠りについた。そして春が訪れたとき、彼女は再び目を覚ました。――すると彼女は、一本の芝生になっていた。

そして再び秋が巡ってきて、彼女が冬の眠りにつこうとしていたとき、彼女の上の空いっぱいに落ち葉が舞い落ちてきた。彼女は心の中でこう不満を呟いた。
「ああ、この秋の落ち葉たちときたら！ なんて騒がしい音を立てるのかしら！ 私の冬の夢をすっかり台無しにしてしまうわ」

〔目（The Eye）〕

ある日のこと、目がこう言った。
「あの谷の向こうに、青い霧に包まれた美しい山が見えるよ。なんて綺麗なんだろう」

耳がその言葉に聞き惚れ、しばらく熱心に耳を澄ませていたが、やがてこう言った。
「だけど、山なんてどこにあるんだい？ 何も聞こえないよ」

すると手が口を開いてこう言った。
「触ろうとして手を伸ばしてみたけれど、何の手応えもない。山なんてどこにも見つからないぞ」

そして鼻が言った。
「山なんて存在しないさ。何の匂いもしないもの」

そこで目は他の方向へと視線を向けた。すると他の器官たちはみな、目が抱いている「奇妙な妄想」について一斉にひそひそと話し始めた。彼らはこう噂し合った。「あいつ（目）は、きっとどこか頭がおかしくなってしまったに違いない」

〔二人の学者（The Two Learned Men）〕

かつて、アフカルという古代の都市に、二人の学者が暮らしていた。二人はお互いの学識を憎み、見下し合っていた。なぜなら、一方は神々の存在を否定する「無神論者」であり、もう一方は神々を信じる「信仰者」だったからだ。

ある日、二人は市場でばったりと顔を合わせた。そして、それぞれの弟子たちが周りを取り囲む中で、神々が存在するのか、あるいは存在しないのかについて、大激論と口論を始めた。何時間にも及ぶ激しい争いの末、二人は物別れに終わった。

その日の夕方、神を否定していたはずの学者は神殿へと向かい、祭壇の前にひれ伏した。そして、自分のわがままで不届きだった過去を許してほしいと、神々に祈りを捧げた。

そしてちょうど同じ時刻、もう一人の学者、つまり昼間に神々の存在を証明していたはずの男は、自分の持っていた聖なる書物をすべて焼き捨てていた。――なぜなら、彼は神を信じない無神論者になってしまっていたからだ。

〔私の悲しみが生まれたとき（When My Sorrow Was Born）〕

私の「悲しみ」が生まれたとき、私はそれを大切に育み、深い慈しみと愛をもって見守った。

すると私の「悲しみ」は、すべての生き物と同じように、強く、美しく、そして素晴らしい喜びに満ちたものへと成長していった。

私たちは互いに愛し合った、私の「悲しみ」と私は。そして私たちは自分たちの周りにある世界をも愛した。なぜなら、「悲しみ」は親切な心を持っており、私の心もまた「悲しみ」と共にあったことで優しくなれたからだ。

私の「悲しみ」と私が語り合うとき、私たちの昼には翼が生え、私たちの夜は夢によって美しく彩られた。なぜなら、「悲しみ」は雄弁な舌を持っており、私の舌もまた「悲しみ」と共にあったことで雄弁になれたからだ。

私の「悲しみ」と私が共に歌うとき、近所の人々は窓辺に腰掛けて耳を澄ませた。なぜなら、私たちの歌は海のように深く、私たちのメロディは不思議な記憶に満ち溢れていたからだ。

私の「悲しみ」と私が共に歩くとき、人々は優しい眼差しで私たちを見つめ、この上なく甘美な言葉を囁き合った。中には、私たちを羨望で見る者さえいた。なぜなら、「悲しみ」とは高貴なものであり、私は「悲しみ」と共にいることを誇りに思っていたからだ。

しかし、私の「悲しみ」は死んでしまった、すべての生き物と同じように。そして私は、ただ一人残され、物思いに耽り、深く考えることしかできなくなった。

今となっては、私が言葉を発しても、その言葉は自分の耳にただ重苦しく響くだけだ。私が歌を歌っても、近所の人々は誰も聴きにやってこない。私が通りを歩いても、誰も私に目を向けない。

ただ眠っているときだけ、私には憐れむような声が聞こえてくるのだ。「ご覧なさい、あそこに横たわっているのは、自らの『悲しみ』を亡くしてしまった男だよ」

〔そして私の喜びが生まれたとき（And When my Joy was Born）〕

そして私の「喜び」が生まれたとき、私はそれを両腕に抱き、屋根の上に立って大声で叫んだ。
「近所の人たち、みんな来て見ておくれ！ 今日、私のところに『喜び』が生まれたんだ！ 太陽の下で笑っている、この微笑ましい姿をみんなで見に来ておくれ！」

しかし、近所の人は誰も私の「喜び」を見にやってこなかった。私は大いに驚きあきれた。

それから七つの月の間、私は毎日、屋根の上から自分の「喜び」を人々に告げ知らせた。――それなのに、誰も私に気を留めようとはしなかった。私の「喜び」と私は、誰からも求められず、誰も訪ねてくることなく、ただ二人きりだった。

やがて私の「喜び」は、青ざめ、疲れ果てていった。なぜなら、私以外のどんな心もその愛らしさを分かち合おうとはせず、私以外のどんな唇もその唇に口づけをしようとはしなかったからだ。

こうして私の「喜び」は、孤立の中で死んでしまった。

今となっては、私は自分の死んだ「悲しみ」を思い出すとき、同時にその死んだ「喜び」を思い出すだけだ。しかし、記憶というものは秋の落ち葉のようなもの。風の中でしばらくの間かすかに囁（ささや）いたかと思うと、もう二度と聞こえなくなってしまうのだ。

〔完璧な世界（The Perfect World）〕

迷える魂の神よ、数ある神々の中で自らも迷子になっていらっしゃる主よ、私の声を聴いてください。
私たちのような狂った、彷徨える魂を見守ってくださる、優しい運命の神よ、私の声を聴いてください。
私は、最も不完全な存在でありながら、完全に出来上がった人種たちの真ん中で暮らしています。

私という人間は、混沌であり、こんがらがった要素の星雲です。そんな私が、すでに完成された世界の間を動き回っています。そこにあるのは、完璧な法律と純粋な秩序を持つ人々であり、彼らの思想は分類され、彼らの夢は整理され、彼らのビジョンは登録され、記録されています。

神よ、彼らの美徳は測られ、彼らの罪は重さを量られています。それどころか、罪でも美徳でもない薄暗い黄昏の中に通り過ぎてゆく無数の事柄でさえ、すべて記録され、カタログに載せられているのです。

ここでは、昼も夜も「あるべき振る舞い」の季節に分割され、非の打ち所がないほど正確なルールによって支配されています。
食べて、飲んで、眠って、裸の体を覆い、そして、しかるべき時間が来たら疲れてみせること。
働いて、遊んで、歌って、踊って、――そして、時計がその時刻を告げたら静かに横たわること。
そのように考え、その程度に感じ、――そして、あそこの地平線の上に特定の星が昇ったら、考えることも感じることもやめてしまうこと。

微笑みを浮かべながら隣人から奪い、優雅に手を振って贈り物を授け、分別を持って褒め称え、慎重に非難し、一言で音（真実）を破壊し、一吹きで体を燃やし尽くし、そして、一日の仕事が終わったら綺麗に手を洗うこと。
決められた秩序に従って愛し、あらかじめ考えられた方法で自分の「最高の自分」をもてなし、ふさわしいやり方で神々を崇拝し、巧妙に悪魔たちを罠にはめ、――そして、まるで記憶が死んでしまったかのように、すべてをすっかり忘れてしまうこと。

動機を持って空想し、考慮を持って熟考し、甘く幸せに浸り、気高く苦しみ、――そして、明日またそれを満たせるように、杯を空っぽにすること。

神よ、これらの事柄はすべて、事前の深い配慮によって構想され、確かな決意によって生み出され、厳密に育まれ、ルールによって統治され、理性によって導かれ、そして、あらかじめ定められた方法に従って殺され、埋められるのです。彼らの人間の魂の中に横たわる、静かな墓にさえ、しっかりと目印と番号が付けられています。

それは完璧な世界、極限まで磨き上げられた優秀な世界、至高の奇跡の世界であり、神の庭にある「最も熟した果実」であり、宇宙の「最高傑作の思想」なのです。

しかし神よ、なぜ私がここにいなければならないのでしょうか？ 満たされぬ情熱の青い種であり、東も西も求めない狂った嵐であり、燃え尽きた惑星からの戸惑える断片にすぎないこの私が。

なぜ私はここにいるのでしょうか、迷える魂の神よ、数ある神々の中で自らも迷子になっていらっしゃる主よ。